

「桃太郎」昔話と「ラーマ」物語

比較研究における課題と“読みの可能性”

田森雅一

1 問題の所在

周知の通り、「桃太郎」は日本を代表する国民的昔話の一つであるにもかかわらず、文字文献によつてそのルーツをたどるのが困難な口頭伝承である。^(注1)そのため、「桃太郎」の成立と変容をめぐる論考・研究は、国文学・民俗学・民族学などの立場から数多くなされてきた。^(注2)柳田国男はその視点を、"桃から生まれる"という異常出生をともなう水辺の"小サ子"信仰に向け、そのモチーフに関しても失われた日本神話に起源を求めた。^(注3)石田英一郎は、柳田の"小サ子"信仰を"母子神"信仰へと発展させ、それが「日本一国の限界内では解きつくせるものではない」として、比較民族学的手法による研究の必要性をといた。一方、関敬吾は、"桃のモチーフ"のみにこだわることなく物語全体の構成を重視した比較説話研究が必要であることを指摘し、柳田の桃太郎論を繼承論と位置づけ、自らは伝播論に沿つてその成立を明らかにしようとした。^(注4)すなわち「桃太

郎」昔話の原型は「神武東征」伝説までさかのばれるが、わが国で成立したものではなく、記紀編纂以前に海外より移動してきた"帰化説話"であるという見解を示したのである。このような伝播論に立つ比較研究には、桃太郎の"ふるさと"を遠くはギリシャ、近くは中国・朝鮮に求める論考があり、さらにインドの国民的長編叙事詩「ラーマーヤナ」に関連づける指摘がある。^(注5)すなわち、犬・猿・雉を連れて鬼ヶ島に鬼成敗を行つた桃太郎昔話と、兄弟と熊・猿・鷹の協力を得てランカ島に渡り羅刹王を倒したラーマの物語とが類似の内容構成を持つことから、両者の間に何らかの関連性を示唆するものであるが、具体的な比較研究に踏み込んだものは少なかつた。^(注6)その理由はいくつか考えられるが、主に、

①「ラーマーヤナ」の内容が「桃太郎」に比べ長大で複雑な内容をもつこと、また、両者ともに少なからず異伝が存在すること

②日本とインドは古代より近代において直接の交渉をもつたことはなく、^(注7)常に中国・朝鮮、の場合によつては東南アジアを介していしたこと

の二つに由来するであろう。すなわち、テキスト比較に際しては“構造”と“偏差”的問題、その接点については“伝播”と“変容”に関する歴史地理的問題という二重の課題が存在するのである。そのため、これらの問題に触れずに日本の昔話「桃太郎」とインドの叙事詩「ラーマーヤナ」の“現在形”をそのまま比較することには無理がある。

本稿は、テキスト比較の際に生じる問題点を明示しつつ、「ラーマ」物語からみた「桃太郎」昔話の“読みの可能性”を多角的に探究しようとするものである。^(注9)このことは、構造分析による変換の可能性や、文献資料に基づく伝播の可能性などの検討のみならず、究極的には国民的な口承文芸が形成・維持されるプロセスと変容の力学を読み取ろうとする試みでもある。

2 「桃太郎」昔話のモチーフ構成と“語られない部分”

“桃”に代表される中が虚ろな器から誕生する“小サ子”を話の核心とし、「一寸法師」「海神少童」「田螺の長者」「瓜子姫」等との関係を求める柳田に対し、関は個々のモチーフの分析だけでなく全体としての昔話の比較を重視した。^(注10)すなわち、桃や箱などの中空物からの主人公の出生譚のみにこだわらずに、

- A 主人公（1.誕生、2.成長、3.旅行、4.鬼ヶ島渡り）
- B 仲間と課題（1.仲間：犬・猿・雉、2.課題：鬼退治）
- C 結末（a.財宝奪取による凱旋、b.娘の解放による凱旋）

というモチーフ構成全体からすれば、「桃太郎」は「力太郎」の変形あるいは童話化したもので、「力太郎」型昔話を媒介することによって比較研究が可能になるとした。確かに、桃からの誕生は重要なモチーフではあるが、それだけでは物語を展開する力を持たない。桃太郎の力の源泉を“桃”（小サ子＝異常出生）に求めるることは真つ当であっても、異常出生によって得た力のベクトルを説明しえないのである。

ここで、桃太郎がなぜ桃から生まれ、人間に育てられなければならなかつたかを形態学的視点から考えてみる必要がある。物語の展開からすれば、桃太郎の力は鬼に代表される怪物退治に向かられていることは間違いない。では、桃太郎の異常出生に由来する力と怪物退治を結び付けるものは何か。桃太郎の旅と仲間の必要性は何を意味するのか。桃太郎ではこれらの点がはっきりとは語られていない。ラーマーヤナから桃太郎昔話の“読みの可能性”を探る上でも、これらの問題は重要なポイントとなるだろう。

なお本論では、桃からの出生モチーフを重視するものを“狭義の桃太郎”、出生モチーフを含め上記のモチーフ構成を有するものを“広義の桃太郎”あるいは“桃太郎型昔話”とし、特に断わらない場合は後者を「桃太郎」昔話として主に扱うことにする。

3 「ラーマーヤナ」の内容とアジア各地への伝播

『ラーマーヤナ』は、『マハーバーラタ』とともにインドを代表す

る国民的二大叙事詩の一つであり、数種の伝本が存在する。この全

七巻、二万四千シユローカ（一シユローカは16音節二行）からなる

大長編物語の全体内容を要約し、モチーフ構成を抽出するのは簡単な仕事ではない。^(注13) 様々なエピソードが機的に連結しているため、りえないからである。しかし、あえて大筋の要約を試みると次のよ

うになる。

「主人公のラーマは、ヴィシュヌ神の生まれ変わりとして王族に生まれ、修行によって力を増す中、大地から誕生したソーラと結婚する（1巻）。次代の王を約束されていたにもかかわらず、側室（継母）の策謀によって王国から森へと追放され、妻のシータと弟の一人ラクシュマナと共に森を彷徨うことになる（2巻）。その途中、シータはランカ島の羅刹王ラーバナに誘拐される（3巻）。その際、シータを守るためにラーバナに戦い挑んで瀕死の重傷をおいつつ、ラーマにシータの行方を知らせるのが巨鳥のジャターユスである。また、ラーマに恩義を感じて手助けをするのが猿侯のハスマーンであり、熊王のジャバーンである（4巻）。最終的にラーマとラクシュマナは動物たちの力を借りて鬼ヶ島であるランカ島にわたる（4～5巻）。そして激戦の末、ラーバナに勝利してシータを奪還して名声が高まる中、母国に凱旋して王位につく（6巻）。その後シータの身の潔白が示され、ラーマは天上にもどりヴィシュヌ神となる（7巻）」

また、モチーフ構成は次のようになるであろう。

A 主人公（1.誕生、2.修行、3.追放・彷徨、4.ランカ島渡り）

B 仲間と課題（1.仲間：①兄弟、②熊・猿・鷹 2.課題：妃の奪還）

C 結末（1.羅刹王ラーバナ退治と妃の奪還、2.王国への凱旋と昇天）

この『ラーマーヤナ』は、古代の聖者・ヴァルミーキの作とされるが、その原型は紀元前数世紀ごろから吟遊詩人等によって口頭伝承されていたラーマ王の歴史的物語（2～6巻）にあるとされている。その後多くの加筆（主に1巻と7巻）がなされ、サン스크リット語によって文字化・編纂されて現在の形に近くなつたのが紀元2世紀ごろと推定されている。^(注14) しかしながら、サンスクリット語は口語として広汎に用いられて現在に至つたわけではなく、バラモン階級および一部知識人によって独占されたために、今日インドに伝わる『ラーマーヤナ』は文字文化としてよりも、語り・歌謡・演劇など様々な形式の“声の文化”としてインド各地で育まれ、伝承され^(注15) てきた。そのためか、ヴァルミキ・バージョンと、インド各地に伝わる異伝や、ジャイナ教、仏教の伝承による「ラーマーヤナ」の内容には多くの相違点が見られる。そこで本論では、ヴァルミキの『ラーマーヤナ』と内容が異なる「ラーマーヤナ」、および非インド語諸国に伝播し変容を経た「ラーマーヤナ」を便宜的に区別し、「ラーマ物語」と表記することにする。

4 主人公たちの異常な出生とその関係

これらの「ラーマ物語」は、紀元四世紀ころにはすでに東南アジア（南伝）^(注16)や、中央アジア・中国（北伝）^(注17)に伝わっていたとされている。ここで重要なのは、中国に伝わった「ラーマ物語」がヴァルミキ・バージョンの特徴を強く残しているのに対し、東南アジア、中央アジアに伝わる仏教バージョンは、本流であるヴァルミキ・バージョンからはずれたジャイナ教伝本や、カシミール伝本の特徴を備えるものが多いことである。

「ラーマーヤナ」の中心的登場人物は主人公ラーマとその妻シータ、そして羅刹王ラーヴァナの三者である。この三者の出生に逆行の関係が物語構造に多大な影響を与えており、ヴァルミキの『ラーマーヤナ』とその異伝および非インド語諸国に伝わる「ラーマ物語」の相違点を大きくしていると考えられる。

ラーマは、生殖によらない象徴的な受胎によって生まれた。子供のないダサラタ王の妃が、ヴィシヌ神からもらった乳麋（pavas）を飲むことで受胎したのである。このモチーフは、桃を食べて一夜にして受胎したという藤田秀素作の『桃太郎』や、滝沢馬琴による『桃太郎』のバリエーションと相似性をもつ。

一方、シータは大地（畦・畠）から誕生し、ジャナカ王に拾われるが、ジャイナ教の一部伝本とカシミール伝本、および東南アジア・中央アジアに伝わった非インド語伝承では羅刹王ラーバナの娘として東南アジアをへてどのように日本に伝播し変容をとげたか、その

て描かれたものがある。自分の娘でありながら、シータの地上への出現は不吉な兆候を伴っていたために、ラーヴアナは生まれたばかりの赤子を“箱に入れて土に埋めた”あるいは“箱に入れて川に流した”のである。その箱を拾ったのがジャナカ王であり、王は自らの娘として育て、シータとラーマは後に結婚することになる。インドの異伝やチベットなどのラーマ物語ではシータを拾うのは王族ではなく農夫の場合もある。これらのモチーフは、桃が土の上を転がってきた紫波郡の「桃ノ子太郎」、箱が流れてきた西津軽郡などの「桃の子太郎」とこれまで相似性をもつ。

また、ラーヴアナは、高貴な生まれを持ち修行によって類稀な力を得ながら、最終的に欲に負けて身を滅ぼした。すなわち、シータに執着して結果的にラーマに成敗されたのである。これは源頼光、坂田金時、平井保昌らに成敗される「酒呑童子」と共通の物語構造をもつと考えられる^(注18)。異類婚姻に起因する異常な聖なる出自を共にもつ桃太郎と酒呑童子、ラーマとラーヴアナ、すなわち退治する者（英雄）と退治される者（怪物）との逆転関係については、別に改めて論じたい。

このように「ラーマ」物語の中心的登場人物の異常出生に関するモチーフのバリエーションは、桃太郎の誕生バリエーションと置換可能である。しかし、類似のモチーフ、形態、構造をもつ物語が何らかの歴史的関係を持つかどうかは別の話である。そこで、長大で偏差のある「ラーマ物語」が、インドから中央アジア、中国あるいは東南アジアをへてどのように日本に伝播し変容をとげたか、その

一端を探つてみたい。

5 中國・日本に伝播した「ラーマーヤナ」

中国の漢訳仏典の中に「ラーマーヤナ」が存在していることを、日本で最初に報告したのは渡辺海旭であつた。^(注20) 彼は、唐代（六五九年）に玄奘の訳した『大毘婆沙論』に、

「羅摩衍那……。たゞ二事を明らかにす。一は、羅伐拏の私陀を脅かして（連れ）去るを明らかにす。二は、羅摩の私陀を将いて帰るを明らかにする。」

と記されていることを指摘した。これは中核となる物語の起結を要約したものである。また、さらに年代を逆上の文献にラーマやラーヴィーナの名が見えることなどから、渡辺は、「ラーマーヤナ」は紀元4世紀の前半までには中国に伝わっていたと結論している。ここで重要なことは、「ラーマーヤナ」が、「ラーヴィーナ」に連れ去られたシータを奪い返すために、ラーマが鬼を殺した話」と、ごく短く要約されていることである。

一方、小野玄妙は渡辺の指摘をふまえつつ、元魏（四七二）の『雜寶藏經』所伝の「十奢王縁」を本邦に紹介した。^(注21) この「十奢王縁」の主人公は人間・羅摩太子（ラーマ王子）であり、側室の策謀によって国を追われる過程や兄弟間（ラーマ、ラクシュマナとバラタ）の葛藤と協力についての記述が中心となり、『ラーマーヤナ』の第一巻および2巻の要約となっている。ここで重要なのはシータや

ラーヴィーナがまったく登場していないことである。
それでは次に、中国から日本に渡った「ラーマ物語」について考
えてみたい。南方熊楠は、「ラーマーヤナ」が、十二世紀後半の『宝
物集』の広本に語られていることを指摘した。^(注22) 『宝物集』における
「ラーマ物語」の概要是次の通りである。

「むかし、觀迦如來、天竺の大國の王とむまれておはしまし
し時、國しづかに、民おだやかにてすぐし給ふ程に、憐國に舅
氏国といふ國あり。……我合戰をこのむ事なし。……我、深山
にこもりて仏法を修行すべし。……一人の梵士出来り、大王の
かくておこなひ給ふ事、希代の事也。……この梵士、后をぬ
みてうせぬ。大王かへり見給ひけるに、后のおはせざりければ、
山ふかくだづね入り給ふ。道に大きな鳥あり。二の羽おれて、
すでに死門にいりぬ。大鳥、大王に申て申さく、日来つき奉り
つる梵士、后をぬすみ奉りてにげ侍り給るを。大王かへり給ふ
までとおもいて、ふせぎ侍りつれども、梵士、竜王のかたちを
現じて、二の羽をけおりたりといひて、ついに死門にいりぬ。
大王、哀とおぼして、高き峰におうりうづみて、竜王にてあり
けると云事をしりて、南方にむかつておはしましけるほどに、
深山の中に、無量百千万の猿、あつまりてののしりける。……
大王猿猴等につげてのたまはく、我年來の后を竜王にぬすみと
られかつ故に龍宮城にむかひて南方へ行くなり、とのたまいまけ
れば、猿猴等申さく、われらが存命ひとへに大王のちから也。
いかでかその恩をおもひしざらん。……竜王、大王の矢に当た

りて、えんこう（炎口）の中におちぬ、小竜等此事を見て、たかわざして逃げさりぬ。猿猴等、龍宮にせめ入りて后をとりかえし、七宝をうばい取りて、本の深山へ帰れり。……こまかにはに六波羅密經(注23)を申ためる「途中七か所省略。棒線筆者」『宝物集』より。

『宝物集』の著者は、その詳細が『六波羅密經』にあると末尾に記述しているが、現在に伝わる『六波羅密經』には「ラーマ物語」は見えない。そこで南方は、『宝物集』卷五の内容とパラレルな吳代（二八〇年までに訳出）の『六度集經』卷五の所伝を取り上げ紹介している。²⁴『六度集經』の主人公は菩薩の権化としての大国王であり、母の兄弟と争うのを避けて自ら森に入る設定になつており、巨鳥と猿の協力による「竜退治」による妃の解放とその後日談がテーマとなつてている。

このように、中国に伝えられた「ラーマ物語」には、『ラーマーヤナ』に比較的忠実な翻訳・要約と、「本生譚（ジャーダカ）」に変形・要約されたものの、少なくとも二種類が存在していたことがわかる。

6 「ラーマ」物語の変容と「桃太郎」昔話との接点

日本の『宝物集』は、『六度集經』の内容に従うものであり、本生譚の流れに属すであろう。ところが、同じ仏教説話の形式をとつても、中国の『六度集經』と日本の『宝物集』の「ラーマ物語」

では大きな相違点がある。²⁵最も異なつてゐるのは、『ラーマーヤナ』の7巻目に相当する妃（シータ）の身の潔白を証明する後日談が『宝物集』では省略されており、逆に「7宝をうばい取る」ことが付け加えられていることである。すなわち、竜退治による「妃の解放」と「宝物の獲得」が二重の成功として表現されているのである。

今日伝わる「桃太郎」の成功は、鬼成敗による宝物と名声の獲得にあり、妃あるいは娘の解放というモチーフは、岩手県紫波郡の「桃ノ子太郎」など若干の例を除き多くの昔話・童話で欠落している。しかし、近代の「桃太郎」から意識的に省かれた妻覓ぎモチーフを有するものを古型とする点では柳田と関が一致をみている。²⁶

『宝物集』の編纂年代からすると、「ラーマ物語」は十二世紀以前に、すでに日本に伝わっていたことは間違いない。また、『宝物集』が仏教の教えを衆生にわかりやすく説明するための種本として用いられ、主に口承伝達されたことを考えると、竜退治型「ラーマ物語」が日本においてさらなる変容を遂げることは容易に想像できる。関は、八岐の大蛇型の竜退治と関連の深い一四世紀中葉に成立した『神道集』の「甲賀三郎」および「二人兄弟」と、「力太郎」の物語形態が同じであることを指摘、さらに桃太郎・一寸法師は力太郎型の昔話から派生し、一つのまとまった昔話を構成したと結論づけた。²⁷この観点からすれば、妃の解放と後日談に力点が置かれた『六度集經』の「竜退治」説話が、妃の解放と宝物の獲得を結末とする『宝物集』の「竜退治」説話へと変容し、さらに「桃太郎」昔話と関連の深い力太郎型「竜退治」伝説へと変容していく可能性を

読み取ることができるであろう。

このように『六度集經』に準ずる「ラーマ物語」が日本に伝えられ『宝物集』に所収されたとすれば、『大毘婆沙論』や『雜玉藏經』等に基づく別の「ラーマ物語」が日本に伝わり、口承伝達される過程で他のモチーフと絡み合い再構築された可能性も十分に残されている。『雜玉藏經』の「ラーマ物語」においては、協力者としての動物は登場せず、兄弟間の葛藤と協力が中心テーマとなっており、力太郎型「桃太郎」との共通点が色濃く見て取れる。なお、桃からの出生との関連では、

「昔は華上子、号して十頭神と曰い、堅固に色欲に執して、縁つて身命を喪没す」^(注28)

という、『佛本行經』の一節が一つの手掛かりとなる。十頭神とは、退治される側の羅刹王ラーヴィアナのことである。華上とはラーヴィアナの母の名（プシュボートカタ・・プシュバは花、ウトカターは肉桂）であるが、これは音読みに漢字をあてたものではなく、意味を漢訳したものである。そのためこの一節は、中国や日本の読者にとっては、「花あるいは果肉から誕生した子供」と解釈される可能性がある。子供が生まれる果肉とは、瓜や桃などの中空物を想像させるであろう。

7 桃太郎の“読みの可能性”

最後に、桃から生まれて人間に育てられた桃太郎が、なぜ仲間を

連れて鬼退治に鬼ヶ島に旅立ったのか、桃太郎とラーマ物語の物語形態を確認した上で、もう一度この問題に立ちもどらなければならない。桃太郎が鬼ヶ島に渡ったのは、宝の獲得や名声が目的ではない。桃太郎が鬼ヶ島に渡ったのは、宝の獲得や名声が目的であつたろうか。これは結果であつて動機ではない。この答えを探すためには、「ラーマ物語」から「桃太郎」昔話を読む作業が必要となる。「ラーマ物語」によれば、羅刹王ラーヴィアナは神とのある約束により神々が倒せない恐ろしい存在であった。そのため、世界の驚異を取り除き秩序を取り戻すためには人間の力が必要とされた。そこで

ヴィンヌス神は、子供が欲しい王妃の体内に受胎し、人間として生まれたのである。しかし人間ラーマはラーヴィアナを倒すという自分の使命を知らない。羅刹王ラーヴィアナと人間ラーマとの接点は、シータの略奪／奪還という一点に求められた。そこで人間ラーマが羅刹王に勝つためには、シータを探す旅の途中で様々な試練（難題）を解決してその力を増し、弟ラクシュマナ、そしてハスマーン（猿）やジャターニス（鳥）、ジャンバーン（熊）という動物たちの協力を得てラーヴィアナを倒す必要があつたのである。異伝によれば、ラーヴィアナはシータが実は自分の娘であることを知らずにさらう。そして人間ラーマは妃であるシータとの縁（運命）に導かれてラーヴィアナと対決する。鬼を退治するためには、尋常な力では及ばない。

そのため、異常な出生をともない、旅と試練・修行によってどんどん力を増すことのできる（異常な成長をともなう）主人公の存在が必要であったのである。

このような「ラーマ物語」の視点からすれば、桃太郎には、運命

的には秩序維持／勸善懲惡のための鬼退治が定められていたと同時に、実際的には妻の奪還のために鬼と戦う必要があった。この二重的目的・動機は、解釈の可能性として保留されると同時に、様々な要因（時代背景、権力・權威との関係、伝達者の属性、場の固有性など）によって取捨選択されると考えられる。

日本に伝わった「ラーマ物語」が、「桃太郎」昔話の成立にどのような影響を与えたかは必ずしもはっきりしないが、長大で複雑なラーマ物語がそのままでは説話やお伽話、童話として定着しえなかつたに違いない。説話が大衆化され、子供を中心とする聴衆の心理的欲求に答えるためには、読んで／聞いてその話とわかる単純な物語構造とイメージを増幅させる仕掛けが同時に要求されたであろう。口頭伝承においては、物語を展開するための伏線が声や身体にも重層的に散りばめられ、聞き手の属性や場の心理的力学によって強調されるモチーフが異なり、時には喚起される類話や異伝との接合が生じる可能性もあるだろう。語られる場においては、いくつかの伝承が複雑に関連し合い、時間経過の中で分化と融合、変換と変形を繰り返しているように思われる。そしてある口頭伝承が時間の中で洗練されてポピュラーとなり、さらに文字化されるプロセスでは権力・權威と関わりをもちつつ、再構築・画一化がなされる傾向にある。

これらのことから考慮すれば、柳田の「小さ子」に代表される固有信仰をベースとした静態的な繼承論とは別な、動態的な繼承論を追求できる可能性があるのではないか。柳田の繼承論では「橋はなく

とも飛石を踏んで神話の彼岸まで渡って行ける」というように、現在から想定されたか遠い過去の参照点に破線的・超歴史的に飛んで行く傾向があるようと思われる。それに対し、動態的な繼承論においては、ある口承文芸の過去から現在に至る限定された期間での偏差の発生と同化のプロセスを解きほぐし、積み上げて行くことが必要となるだろう。この視点においては、特定の口承文芸が固有（特殊性／繼承）か外来（共通性／伝播）かは重要な争点ではなくなる。問題は、このプロセスは単純な定式化が不可能であり、「読みの可能」していくものの枝道に別れ、しかも絡み合いながら現在に開かれているということである。本稿では、これらの可能性のうちのほんのわずかに、しかも雑然と触れられたにすぎず、多くの問題が残されている。これらの点は今後の長期的な課題であり、諸先輩・先学の方々の御教示を頂ければ幸いである。
(注29)

註

- 1) 文字文献に残る最古の「桃太郎」は、江戸中期、享保年間（一七一六—三六）に書かれた藤田秀素作の『桃太郎』であろう。
- 2) 桃太郎の総括的研究については滑川道夫一九八一参考。
- 3) ただし、柳田国男の『桃太郎の誕生』において問題にされてい

るのは、昔話の成立一般であって、「桃太郎」の成立のみを論じたものではない点には留意すべきである。柳田の主張は固有信仰＝繼承論と規定される場合が多いが、生涯作品を通した言説には単純に定式化を許さない“含意”がある。柳田の問題意識と「桃太郎」の位置づけに関しては野村純一「九九〇」参照。

4) 関敬吾は「桃太郎」の成立を考えるにあたり、グリム兄弟による民間文芸の分布・発生に関する三つの可能性、すなわち繼承論、移動論（伝播論）、多元發生論を取り上げた「関一九八〇・一九九一二〇九」。ここで関は、多元發生論について「心理的問題」として避けているが、この点はあらためて検討を要する問題であると思われる。

5) 関敬吾は「桃太郎」を中国南方の類話と比較する一方「関一九七八・八五」、最終的な起源をギリシャの英雄伝説『アルゴナウテン』に求めた「関一九八〇・一二三三」。中国南方・雲南の類話とのより詳細な比較研究は伊藤清司「一九九一a」、吉備津彥命の鬼退治伝説と朝鮮半島の温羅伝説との関連については伊藤一九九一b参照。なお、雲南・少数民族の「ラーマ物語」については岩本一九八五・三三八一五二参照。

6) 「桃太郎」と「ラーマ・ヤナ」の関係を示唆したものとしては、三木栄一九六〇・五一八、関一九六八・六四四、伊藤一九九一・二八四一八五などがある。また、「桃太郎」と「ラーマ・ヤナ」の接点を“箱舟漂流型説話”に求めた考察としては、原実一九七八、井上一九八四がある。

7) その例外として原一九七八がある。

8) 日本とインドの古代における直接的人的交流の稀な例としては、東大寺の大仏開眼供養の際にインドより招かれ、中国經由の海路で天平八年（七三六）に日本に到着したバラモン僧・菩提仙那（Bodhisena）と林邑僧・仏哲の例がある。菩提仙那は天平宝字四年（七六〇）に没すまで華嚴經や梵語を教授した。仏哲と、奈良時代には宮中舞楽として盛んになった度懶樂、および「ラーマ物語」の関係については田中於菟弥「九七四」参照。

9) 関は構造とモチーフ構成をほぼ同義で用いているが、モチーフ構成と、物語における機能を重視する統辯論的な構造（形態）と、変換／変形の論理を重視する範例的な“構造”とは区別して用いたい。

10) “読みの可能性”とは、「桃太郎」を読み取るべきテキストとして扱うことを意味する。なお本論考では、現在利用できるテキスト＝文献比較を中心としているために、口頭伝承の研究には欠かすことのできない、場と時間、聴衆、声や身体技法の問題等については考慮されていない。この問題は今後の課題の一つである。

11) これまでの桃太郎論では、①繼承論と伝播論、②固有モチーフと全体構成、という二つの争点があり、繼承論は固有モチーフと結びつくイーミックな視点、伝播論はモチーフ構成と結びつくエティックな視点が重視される傾向にあると考えられる。なお、宗教民俗学の視点から他界往来譚としての“鬼退治”を重

視し、その起源を『古事記』に求める繼承論的立場や「五來一九九一」、桃からの誕生を重要視しつつ近隣諸国（特に中国）の類似説話と全体構成の比較を試みる立場「伊藤一九九一-a」などがある。

- 12) 関一九六八・六二六、一九七八・八五、一九八〇・二二〇。
13) 現在のところ、ヴァルミキ・ラーマーヤナの日本語完全訳は出版されていない（二巻までのすぐれた翻訳としては岩本裕訳一九八〇&一九八五がある）。その概要を知るには、河田清史編著一九七一、田中一九八二参照。サンスクリット語からの直接英訳として比較的手に入りやすいものとしては、Raghunathan 1981がある。サンスクリット伝本・刊本については岩本の解題一九八〇&一九八五が参考になる。「ラーマーヤナ」のインドにおける現況についてはRichman 1991を、「ラーマーヤナ」など口頭叙事詩の文化人類学的研究に関してはBlackburn 1992を、インドにおける口頭伝承全般に関してはラーマースシャン一九九五参照。

- 14) 岩本一九八〇&一九八五「解題」参照。

- 15) サンスクリット語のヴァルミキ・ラーマーヤナは、一六世紀にトルシーダースによつてビンディー語によつて書き直され、今日の語りものや歌謡、演劇のベースとして用いられている。この詳細なフィールドワークと分析については、Lugendorf 1991を参照。『声の文化』の諸特性に関しては、オング一九九

16) 三木栄一九六一参照。
17) 榎一雄一九七九参照。
18) ラーマとシータを兄弟とする異伝もある。
19) 酒呑童子と桃太郎の関連については藤沢一九六〇参照。
20) 渡辺海旭一九三三-a&一九三三-b参照。
21) 小野玄妙一九七七「一九二二」・三二七一九。読み下し文は岩本一九八〇・三三二一三四参照。

- 22) 南方熊楠一九七一「一九一四」参照。なお、南方は別の著作でイタリアの桃太郎型説話の短い紹介をしているものの、「ラーマーヤナ」と「桃太郎」との関連付けや分析はなされていない
「南方一九七五「一九二〇」】。
23) 『宝物集・九冊本』三〇八一一四頁。
24) 南方一九七一「一九一四」・三八一八三。読み下し文は岩本一九八〇・三二八一三一参照。

- 25) 原によれば、『六度集経』と『宝物集』の「ラーマ物語」では類似点よりも相違の方が多く、『宝物集』は口伝によつて伝わったものとし、その起源を注⁹）の菩提仙那に求めている「原一九七八・五三一一二、岩本一九八五・二九七一九九」。
26) 柳田一九九〇-a・三五一八および関一九八〇・二一一一四。
27) 関一九六八・六二四二六・一九八〇・二〇九一二一〇。
28) 渡辺一九三三-b・二五九一六〇。

- 29) 柳田一九九〇-a・三七。
30) 過去に存在した「純粹な文化」の喪失という、近代の「ヒント」

「ローマークな語り口」の問題点についてもCrifford 1988 参照。

一九九〇 b 「一九四七」『口承文芸史考』やくま文庫・
柳田國男全集8巻

●主要参考文献

- 〔桃太郎論・桃太郎研究〕
- 石田英一郎 一九八四 「一九五六」『桃太郎の母』講談社学術文庫
- 伊藤 清司 一九九一 a 「桃太郎の故郷」『昔話伝説の系譜・東アジアの比較説話』第一書房
- 井上 隆明 一九八四 「桃太郎と箱舟型モチーフ」『口承文藝研究 第七号』日本口承文藝学会
- 佐々木喜善 一九二六 「桃ノ子太郎」『紫波郡昔話』郷土研究社
- 関 敬吾 一九六八 「八岐の大蛇の系譜と展開」『日本民俗と南方文化』平凡社
- 一九七八 「日本昔話大成3」 角川書店
- 一九八〇 「桃太郎の郷土」『関敬吾著作集4』同朋舎
- 五来 重 藤沢 衛彦 一九六〇 『日本民俗学全集』あかね書房
- 滑川 道夫 一九八一 「桃太郎像の変容」東京書籍
- 野村 純一 一九九〇 解説『口承文芸史考』やくま文庫・柳田國男全集8巻
- 柳田 國男 一九九〇 a 「一九三三」『桃太郎の誕生』やくま文庫・柳田國男全集10巻
- 〔ラーマーヤナ〕
- 阿部 知二訳 一九六六 「ラーマーヤナ」『世界文学全集III-2』河出書房
- 岩本 裕訳 一九八〇 『ラーマーヤナ1』平凡社
- 河田 清史 一九七一 『ラーマーヤナ上・下』レグルス文庫
- 田中於菟弥 一九八二 「ラーマーヤナ」『インドの神話・今も生きる神々』筑摩書房
- Raghunathan, N. 1981 (translated from Sanskrit, in 3vols) *Srimad Varmiki Ramayana Madras: Vighnheswara Publishing House.*
- 〔ラーマーヤナ研究〕
- 岩本 裕 一九八〇 「解題・ラーマーヤナ」『ラーマーヤナ1』平凡社
- 一九八五 「解題・ラーマーヤナ(1)」『ラーマーヤナ2』平凡社
- 榎 一雄 一九七九 「コータン語のラーマ王物語」『シルクロードの歴史から』研文出版
- 小野 玄妙 一九七七 (大正二年) 「緊那羅物語と羅摩武勇譚」『小野玄妙著作集2』開明書院
- 田中於菟弥 一九七四 「度羅葉とインド古典ラーマーヤナ」『醉花

ley: University of California Press.

- 原 實 一九七八「ラーマ物語と桃太郎童話」『ホリヒノト学
・インズ学論集』国書刊行会
- 三木 栄 一九六一『タイ国の西遊記（ラーマキエ）』平凡社
- 南方 熊楠 一九七一「九一四」「古き和漢書に見えたるラーマ王
物語」『南方熊楠全集・第一巻』平凡社
- 一九七五「一九二〇」「童話桃太郎」『南方熊楠全集・
別巻』平凡社
- 吉田幸一・小泉弘編 一九六九『宝物集・九冊本』古典文庫二五八、
二〇九一三一四頁
- 渡辺 海旭 一九三三「一八九六」「佛典中に出てゐる「羅摩衍
那」及び其人物」『壺月全集・上巻』壺月全集
刊行会、二五九一五八頁
- 一九三三「一八九六」「佛典中に出てゐる「羅摩衍那及
び其人物」を補い、且つ大方の諸君に質す」
『壺月全集・上巻』二五九一六〇頁
- Blackburn, S. H. et. al (ed). 1992 *Oral Epics in India*. Berkeley:
University of California Press.
- Lutgendorf, P. 1991 *The Life in a Text: Performing the
Rāmacatrimānas of Tulsidas*. Berkeley: University of California Press.
- Richman, P. 1991 *Many Rāmavāya: The Diversity of a
Narrative Tradition in South Asia*. Berkeley:

渡辺 海旭

一九三三「一八九六」「佛典中に出てゐる「羅摩衍
那」及び其人物」『壺月全集・上巻』壺月全集
刊行会、二五九一五八頁

付 記

拙稿は、第一回・日本口承文藝学会大会において発表した内容
の一部を加筆訂正したものである。発表に際しては、野村純一教授
(国学院大学)、坂田貞一教授(拓殖大学)に、原稿化に際しては、
伊藤清司名誉教授(慶應義塾大学)にお世話をになりました。また、
阿部年晴教授(埼玉大学)は草稿に目を通して頂き、貴重なコメント
を頂かねばならぬ。この記して感謝の意を表わせて頂かねば。

(たより・おやふや／日印交流振興財団)

三木 栄 一九六一『タイ国の西遊記（ラーマキエ）』平凡社
一九七一「九一四」「古き和漢書に見えたるラーマ王
物語』『南方熊楠全集・第一巻』平井社

一九七五「一九二〇」「童話桃太郎」『南方熊楠全集・
別巻』平凡社

Crifford, J. 1988 *The Predicament of Culture: Twentieth-Cen-
tury Ethnography, Literature, and Art*. Cambridge: Harvard University Press.

〔Nの他参考文献〕
オング、W・J 一九九二（桜井直文他訳）『声の文化と文字の文
化』藤原書店
ハーマン・A・K 一九九五（中島健訳）「序論」『マハーナ
の民話』青土社